
銀の月と銅の星

かぜのあけち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の月と銅の星

【Zコード】

Z4010X

【作者名】

かぜのあけち

【あらすじ】

門外顧問組織に所属するオレガノ。

彼女が世話になっていたある組織が何者かによつて壊滅した。その原因をさぐりにバジルと共に向かつた並盛町で知つた真実とは…。以前、GREENにのせたものです。

プロローグ

並盛商店街の中に、小さなイタリア料理店がある。灯りを押さえた落ち着いた店内は夜という時間と相成つて恋人達が多く見受けられた。

その店内の奥、シャマルが黒岩と向かい合せに座っていた。

二人とも、ここへ入つて注文してから何一つ話さうともしない。

しばらくして、店員がシャマルにコーヒーを、黒岩にオレンジジュースを置いて立ち去ると、シャマルがスープの内ポケットから煙草を取り出した。

「シャマル」

黒岩が顔をしかめてテーブルをトントン、と叩く。

テーブルには「禁煙」の文字と煙草の絵に斜線の引かれたピクトグラムの描かれた小さなボードが貼つてあった。

そのボードを一瞥してため息をつくと、シャマルは取り出した煙草をしました。

「俺に煙草をやめろっていつのか

「あら、その方が健康のためにも良いわよ。仮にも医者なのでしょ

う

くすくす笑つ黒岩に渋い顔を向けながらシャマルはため息ひとついた。

「「めんなさいね」

オレンジジユースにストローを差しながら笑っていた黒岩が不意に真面目な顔になる。

「本当はまつと大事な話をするために私を呼んだのでしょうか？」

「ああ」

田の前のコーヒーを少しずらしてシャマルは話し始めた。

「正直、平和に暮らしているお前達に頼むのは俺としても気が引ける。だから、断るなら今のうちだぞ」

「聞く前から断るの？」

「聞いたらきっと断れなくなると思つたからな」
黒岩がシャマルの顔をじっと見ている。それから、ストローでオレンジジユースをかき回しながら言つた。

「私に頼み事をするなんて、よっぽどの事なのでしょう。なら、断る理由はないわ。
話してもうえるかしり」

「すまないな」

そう前置きをして、シャマルは言つた。

「ダフネ・ノーチェを預かつてほしい」

黒岩のストローを持つ手が止まつた。

「ダフネが生きていたのですか？」

シャマルに訪ねる声が心なしか震えている。

「見つかったのはつい先日の事だ。俺も彼女に会うまでは生きているなんて知らなかつた。

ただ、見つかったのはいいんだが、彼女自身精神的ダメージが強すぎてまともに話が出来る状態ではないんだ。
だから、彼女が落ち着くまでお前の方で預かつてほしい」

しばらくの沈黙。

黒岩が持っていたストローから手を離した。

カラソ、とグラスの中で氷が音を立てる。

「本当は他の手を考えたかったが、彼女の状態を考えたら昔面倒を見ていたお前に預けるのが一番だと思つてな」

「…ありがと」

黒岩が笑う。その笑顔がどことなく寂しそうなをシャマルは見逃さなかつた。

「すまない。だが、お前達の事は俺がこの身に代えても守る。なるべく今の生活を壊さない様にせつてみるつもつだ」

「心配しないで。私も子供達もそれなりの覚悟は出来ているから。それに、ダフネが生きていたのですもの、夢幻もきっと喜ぶわ」

そう言ってグラスを手に取るとストローに口をつけた。

シャマルもそれに習い、冷めかけたコーヒーを何も入れずに一口飲んだ。「明日彼女に会わせる。何だったら子供達も一緒に連れて来ていいぞ。とりあえず、礼代わりに今晚俺と付き合わないか

「どうでも紛れで私を口説くつもり?」

「俺はいつも本気だぞ」

「……知ってる。十年来の付き合いだから

シャマルが怪訝な顔で黒岩を見た。
いつもなら、

「こんな年増を口説いて」

そう言つては笑はずの彼女だったからだ。

そんな彼を見て、黒岩は言つた。

「今日は付き合いつわ

予想外のその言葉にシャマルが呆けている。
そんな姿を見て、黒岩は口元を押さえて笑つたのだった。

プロローグ 2

並盛中の屋上で、落下防止のフェンスに寄りかかって夢幻は何も考
えるとなく空を見ていた。

(空が高いなあ)

昼休みの屋上、そろそろ午後の授業が始まるせいか、人影はない。
教室で一緒に昼食を取る友人のいない夢幻は昼休みになると必ずこ
こに来て一人で食事をしている。

彼女自身、人が嫌いと言つて訳ではない。時々ではあるが、彼女を誘
つてくれる人もいる。

ただ一人の方が気が楽、それだけなのだ。

そろそろ戻ろう、そう思つて足元にあつた空の弁当箱を拾つて歩き
出をつとしたその時だった。

人気のない屋上に、歌声が聞こえてきたのだ。

どこから聞こえて来るのだろう、そう思つて夢幻が辺りを見回すと、
少し離れた所、フェンスの上に一羽の黄色い小鳥が止まっていた。

歌声はそこから聞こえてくる。

どこかで聞いた曲だな、そう思つて口ずさんでみて思い出した。

(なるほど、校歌ですか)

黄色い小鳥が並盛中校歌を歌っていたのだ。

その見事な歌い方に、夢幻は感心した。

それにもしても、と校歌をさえずつている小鳥を見ながら夢幻は思つた。

一体誰がこの黄色い小鳥に校歌を教えたのだろう。これだけ歌えると言ひ事は何度も歌つていてるか、聞いているに違いない。

そんな事を思いながら小鳥を見てじるうちに、いつの間にか夢幻自身も小鳥と一緒になつて歌つていた事に気がついた。

一通り歌い終わって黄色い小鳥がパタパタと飛び去つていいく。その小鳥を見送つて夢幻もまた、教室へと戻つていった。

その次の日。

いつもの様に、屋上にあがると、珍しく人の姿がない。

弁当片手にキヨロキヨロと辺りを見回してなるほど、と夢幻は納得した。

フーンスに寄りかかって空を見上げている少年の姿があつたからだ。

(確か、この学校の風紀委員長だった様な)

この学校に入学して間もない夢幻でも彼の事は噂に聞いていた。

並盛中風紀委員長、雲雀恭弥。

生徒はもじらりんの事、先生でさえも彼には逆らえないと言われている。

裏で不良を束ねているとも、気に入らない人間は再起不能にしてしまつとも噂されていた。

そんな彼だけに、誰も関わりたくないのだろう。

彼から少し離れた所に座り、夢幻は弁当を広げて食べ始めた。

食べながら空を見ると、昨日同様、空が高い。

程なく弁当を食べ終え、空になつた弁当箱を包むと、それを持つていたかの様に、昨日の黄色い小鳥が夢幻の側のフェンスに舞い降りてきた。

それから、夢幻を見て首を傾げるとお得意の並盛中校歌を歌い始めたのだ。

そんな小鳥に、夢幻はすまなそうに言った。

「今日はごめんね、一緒に歌えないの。その代わり、君の歌を聞かせてくれるかな？」

夢幻の言葉に、小鳥のさえずりが止まつた。夢幻を見てまた少し首を傾げ、パタパタと飛び立つていった。

悪い事をしたかな、そう思いつつ夢幻もまた立ち上がり、屋上を後

にじょうとじしたその時だつた。

不意に、背筋が凍りつく様な気配を感じたのだ。

それなりの場数を踏んでいる夢幻にとって、それが殺氣だと感じるのものの数秒とはからなかつた。

その気配に、夢幻が振り返る。

振り返った先、眠っているのか目を開けてフェンスに寄りかかっている雲雀の姿があるだけだ。

(今の、なんだつたのだろう)

あれだけの殺氣は夢幻も感じた事はなかつた。

いぶかしみながらも、夢幻は屋上を後にした。

その日の放課後。

人気のなくなつた学校の屋上に夢幻は上がって来ると、キョロキヨロと辺りを見回した。

「やつぱり、来てないよね」

黄色い小鳥が来てないか見に来ていたのだ。

もしかしたら、一緒に歌いたがっていたのだろうが、そう思つてこ

「にきたのだ。

もちろん、それは夢幻の勝手な想像であつて、実際はそうでもないかもしない。

たかが小鳥なのに、どうしてここまで氣を使うのだろうかと思いつつ、そんな自分に夢幻は笑つた。

落下防止フェンスから街の景色を見ると、夕暮れの街並みがよく見える。どこからか聞こえて来る「夕焼けこやけ」のチャイムを聞きながらそんな街並みを見ていたその時だつた。

パタパタ、と聞きなれた羽音が聞こえてきたのだ。

その音を頼りにフェンスの上を見ると、あの黄色い小鳥が止まつて夢幻を見ている。

「さつきは」めんね

フェンスに止まっている黄色い小鳥を見上げながら夢幻は言った。

「君に言つてもわからないかも知れないけど、私、人前で歌うの駄目なんだ。

だから、周りに人がいない時に一緒に歌つてあげる」

黄色い小鳥が首をかしげて夢幻を見ている。

わかつてくれたかな、そう思いながら黄色い小鳥を見ていると、その小鳥が校歌を歌い始めた。

一通り、一番を歌つたところで夢幻を見る。

やはり、一緒に歌つてほしいのだろうか。

「よし、田が沈むまで歌おう」

そつ黄色い小鳥に話しかけると、夢幻も一緒になつて歌い始めた。

それから毎日、放課になると夢幻は屋上へと行く様になった。

屋上に上ると、まず、黄色い小鳥を探す。そして、その姿を見つけると一緒になつて校歌を歌うのだった。

そんなある日。

いつもの様に歌つていると、不意に小鳥が歌つのを止めてパタパタと飛び立つて行く。

小鳥の飛び立つた先を見ると、屋上の入り口に雲雀の姿が見えた。

不機嫌そうな雲雀のその肩に黄色い小鳥は悠々と止まる、のんびりと毛繕いを始めた。

同時に、夢幻はまたあの殺氣を感じていた。

まだだ、と夢幻は思った。

この屋上にいるのは夢幻以外は入り口にいる雲雀ただひとり。

と、言つたまゝのピコピコ来る殺氣は間違いない雲雀から来てい

るのだけれど。

夢幻がわからなかつたのは、どうしてその殺氣が自分に向かはれているのか、と言う事だった。

まだ数えるほどしか会つていない彼に殺氣を向けられる理由がわからなかつたのだ。

その雲雀が、夢幻の前に来て、言つた。

「君、歌わないの？」

何の事かわからずきよとん、としている夢幻に、雲雀はもう一度言った。

「歌わないの？」

不機嫌そうに言つて雲雀を見ながら何を、と聞こいつじて不意に思いつたつた。

「もしかして、校歌を？」

黄色い小鳥が雲雀になつてゐる所を見ると、もしかしたらこの小鳥に並盛中校歌を聞かせているか、あるいは教えているのは間違いない雲雀なのだろう。そして、夢幻が小鳥と一緒に歌つてゐるのを何処かで聞いていたに違ひない。

歌わないことじつなるか。そう思いつつ、夢幻は雲雀を見て言つた。

「私、人前で歌おつとすると声が出なくなるの。だから悪いけど、

あなたの前では歌えない

本当の事だった。

夢幻自体、歌を歌うのは大好きで小さい頃は人前でよく仲のいい友達と一緒に歌つて歌つていた。

それが出来なくなったのは一緒に歌つた事でその友達を不幸にしてしまったから。

「そう言つ訳で、私達の邪魔はしないでくれる？」

殺氣を無視して雲雀の横を通り過ぎ、夢幻は屋上を後にした。

雲雀もまた、そんな夢幻の後ろ姿をただ黙つて見送った。

それからだつた。

夢幻が屋上に上がって小鳥と歌つている時、雲雀が屋上に来る事はなかつた。

ところが、夢幻が用事などで屋上に来られない次の日の昼休み、まるで夢幻が来るのを待つていたかの様に雲雀がそこにいて、

「今日は歌わないの」

と、聞いてくるのだ。

そのくせ、夢幻の返事を待たずにいなくなってしまつ。

(一体、何なのやうり…)

でも、と夢幻は思つ。

もしかして氣を使つてゐるつもりなのだろうか。

それとも、ただ歌が聞きたくて催促しているのだろうか。

どちらにしても、こつちの事情なんて考へていらないんだろうな、そう思いながらもなるべく時間の許す限り、屋上へと上がるのだった。

そんなある日。

夢幻が家の用事で早く帰らないといけないため、その日は屋上へと行かず、まっすぐ校門へと向かつていた。

そんな夢幻を呼び止める者があつた。

「お前だな、風紀委員長の前で歌わない生意氣な女は」

その声に、夢幻が振り返つた。

数人の学生服の男達が夢幻を睨み付けている。その腕には「風紀」の腕章がこれ見よがしに付けられていた。

その一人が夢幻の前に立ち、睨み付ける。

「痛い目に会いたくなれば、大人しく言つ事を聞くんだな」

「大人しく？」

「委員長の前で歌えばいい事だ」

いつの間にか夢幻の回りには彼らが取り囲んでいる。そのただならない雰囲気に他の生徒達はただこの様子を遠巻きに見てているだけだ。

「ユウちは急いでいるの。どうしてくれる？」

夢幻も負けではない。目の前にいる男の一人を睨み付け、その脇をすり抜けようとする。

その前を、男が数人立ちふさがった。

「一つ聞きたいんだけど」

なるべく冷静さを保ちつつ、夢幻は聞いた。

「これって、あなた方の言つ風紀委員長があなた方に頼んだ事なんかしら」

「お前が知らなくてもいい事だ」

「て、事は雲雀さんは知らないのね」

もし雲雀が彼らに命令したのなら夢幻は彼に対して失望していただろ。それに、もしこんな事を命令するのなら夢幻が屋上で彼の前で歌つのを断つた時点でやつていいはずだった。

言つ事を聞かない、なんてのはただの言い訳なのだろう。ただ、目の前の人間が思い通りにならないのが気にくわないだけに違いない。

そつ考へたら夢幻を取り囲んでいる男達に腹が立つた。

ブレザーの内ポケットに手を入れると、そこから愛用の武器、鉄扇を取り出した。

「あなた方が力ずくで私を連れて行こうとしたのなら、うちもそれ相応の事をしますよ」

男達に戸惑いを含んだざわめきが広がる。まさか、目の前の女子生徒が武器を手に反抗するとは思つても見なかつたからだろ？

一触即発の雰囲気に、この様子を遠巻きに見ていた生徒達も固唾を飲んで見守つてゐる。

先に動いたのは相手の方だつた。
男のひとりが夢幻に飛びかかってきたのだ。

男の手が伸びて夢幻の胸ぐらに掴みかかる！とする。

その手がブレザーの襟を掴む寸前、夢幻は軽く後ろに避けて男の手を思いつきり持つていた鉄扇で弾いた。

男が打たれた手を押さえてうづくまる。

同時に、周りにいた男達が色めきたつた。口々に叫んでいる。

「大丈夫か！？」

「あの女、下手に出ればつけあがりやがつて……」

「もつ容赦しねえ！…」

そんな男達を見ながら夢幻もまた鉄扇を構えた。

ひと悶着ありそうなの光景を誰もが固唾を飲んで見守っていたその時。

「お前ら、何やつているんだ！…」

不意に、男達の後ろで怒号が飛んだ。

男達の姿に隠れて声の主は見えない。しかし、男達の間に一種の緊縛感が漂っている。

もしかしたら彼らより偉い人なのだろうか。

夢幻がそつ考えていたに、男達の間からひとりの男性が現れた。
髪をリーゼントにしてこの学校の物ではない学ランを着ている。その姿は一昔前の番長と書つたところだらうか。

彼を見て男達が口々に「草壁さん」とつぶやいている。

その草壁が男達を睨みつつ、静かな声で言つた。

「お前達、何をしていろ」

「草壁さん、実はこの女があまりにも生意氣なものでちよつと締め上げるつもりでした」

「誰がそんな許可を出した？それに、今のお前達はそんな事をしている場合ではないだろ？」

静かな声だが、その声には逆らえない何かを夢幻は感じた。その言葉に、男達が一斉に直立不動の体制を取り、

「申し訳ありませんでした！」

草壁に向かつて頭を下げた。

男達が校舎へと去つていいくと同時に、遠巻きに見ていた生徒達も安心半分、残念半分で蜘蛛の子を散らしたかの様にいなくなつていつた。

周りに人がいなくなつたのを確認して、草壁が夢幻に頭を下げた。

「申し訳ありません。自分がいながらあなたを危ない目にあわせてしまいました」

「別に、あなたが謝らなくてもいいのです」

「いえ。あの者達の不始末は自分の責任もあります」

「うちは構わないわよ。売られた喧嘩は買つだけだから」

その答えに、草壁はただ困った様な笑いを浮かべるだけだった。

それからしばらく、草壁の姿を校内のあちこちで見かける様になつた。

放課後屋上に上がる時。

家の用事で早く帰らないといけない時。

さりげなく彼の姿を見る様になった。

そのせいだらうか、夢幻に喧嘩を仕掛けた風紀委員の男達の姿を見る事がなくなつた。

初めは少し迷惑だと思つていた夢幻だが、その草壁の様子を見ているうちに、何となく彼の人となりがわかり始めた。

何しろ、その現れ方が本当にさりげなく、夢幻の行動を妨げていな
いのだ。

見た目と違つて案外纖細なところがあるのだろう。

半ば迷惑ながらも、そんな彼を視線の片隅で追いかけていた自分に、
夢幻は少し笑つた。

そんな日々が一週間も続いた頃、夢幻は思いきつて草壁を屋上へと
呼んだ。

「風紀委員副委員長の草壁さん、もう私の護衛はいりませんよ」

目の前にいる彼が風紀委員副委員長の草壁だと夢幻が知ったのはつい一二、三日前の事だった。あの時、彼がなぜ夢幻に謝ったのかわからなくて彼女自ら調べたのだ。

「ヒカルで、私の護衛って、雲雀ちゃんに頼まれた事なのかな？」

「いえ、自分が勝手にした事です。あなたが歌つ校歌は委員長の気が入りなものですから」

やつぱり、と夢幻はつぶやいた。

同時に、こんないい人を従えている雲雀を少し羨ましくも思つた。

「まあ、そんな事だらうとは思つていたけどね」

それから、草壁を見て言つた。

「僕迷惑でなければ、今度デートしてもいいませんか」

留学生バジル

空を見ながらバジルは額の汗を袖でぬぐつた。それから、手に持った木の桶を地面に置くと柄杓で水を撒き始めた。

イタリアの郊外、ボンゴレファミリーが所有する別荘のひとつに日本家屋風の屋敷がある。

ファミリーが所有している別荘の中では比較的小さい方だと言われてはいるものの、その広さはその辺りに建っている別荘とは比べ物にならない位見事なものだ。

平屋建ての屋敷は畳の敷かれた部屋がいくつもあり、先日畳を入れ換えたのだろう、い草の気持ちいい香りが漂っている。

部屋にはそれぞれ庭がついていて、あるところには大きな錦鯉のいる池がついていたり、またあるところには大きな桜の木があつたりと、それぞれ日本をテーマにした庭になっていた。

その別荘の入り口でバジルは何するとななく打ち水をしていたのだった。

この暑さでは打ち水をしてもそんなに涼しくはならないかもしれない、そんな事を考えながら水を撒いているバジルに声をかける者があつた。

「精が出るわね、バジル」

「お疲れ様です」

バジルに声をかけたのは同じ組織の仲間であるオレガノだつた。ス
ーツに身を包んでいるものの、バジルほど汗はかいていない。

「親方様はいらっしゃるかしら」

「先程帰つて来ました。オレガノが帰つて来たらすぐ来る様に言つ
てました」

「わかつたわ。そうね、もしかしたらバジルにも手伝つてもうつか
もしれない」

また後で、そつと中へと入つて行つた。

オレガノの言葉を気にしつつ、桶を持って残りの水を全て撒き終え
ると、中へと入つて行く。

日差しの遮られた室内は外より幾分かは涼しい。

入り口のホールを抜け、奥に入ると、小さな土間に出来る。そこに桶
と柄杓を置いて手を洗つていると、程なくオレガノが入つて來た。

「親方様がお呼びよ。やっぱりあなたにも手伝つてほしいみたい」

「わかりました。すぐ行きます」

奥にひときわ大きな和室がある。

十畳ほどの大きさのそこは枯山水の庭園があり、わびさびの趣をか
もし出している。

入り口で靴を脱いで上ると、親方様こと沢田家光が待つていた。

そして、バジルが家光の前に来て正座するのを見ながら話を切り出した。

「早速だが、オレガノと一緒に並盛町に行つてほしい」

「並盛町ですか」

並盛町と言えば、ボンゴレフードコー^ミトナードであるシナ^ミと沢田綱吉が住んでいる町だ。

「沢田殿の身に何かあつたのですか」

「まだそこまでは行つてない。ただ、その可能性も否定出来ないからな。そこで、オレガノと一緒にそのあたりを調べてほしい。すでにこひらからの手配は済ませてある」

そう言って家光はバジルの前にポン、と何かを置いた。

バジルが手に取りそれを見た。

それは、小さな手帳だった。

紺色のビニールのカバーがかけられていて、左半分が透明になつている。

透明なカバー越しに書かれた内容から、それが写真の貼つていらない並盛中学校の生徒手帳だと気づくことがわかつた。

「表向きは留学生として動いてほしい。ただし、ツナ達に本当の目的は内緒でな」

「沢田殿や守護者の監視には話せない事なのですか?」

「今の所はな。だから、少しありで処理出来るのがせめていいで済ませておきたい。いいな」

わかりました、と黙つてバジルはうなずくと、持っていた生徒手帳をしげしげと眺めた。

「嬉しそうだな」

そんなバジルを家光が一いやいやしながら見ている。

「いえ、そんな事はありません」

自然と思つた事が顔に出たのだろうか。
遊びに行く訳ではないのだから、そう自分をたしなめて気を引き締めた。

「構わないさ、むしろ学校生活を楽しんで来るがいい。」
「事も大事だぞ」

バジル自身は幼い頃から家光について仕事をしているため、勉強は主に通信教育と仲間達から教わっている。

「調査はまちやんとやります」

そう言いつつ、内心、初めての学校生活にわくわくしているバジルだった。

「詳しい話はオレガノから聞くといい。今回の仕事は彼女に全て任

せてあるからな

「了解しました」

家光に一礼をして立ち上ると、そのまま、バジルは和室を後にしたのだった。

オレガノ先生

「今日からイタリア語の臨時講師を勤めます、オレガノと言います」

彼女の姿を見たとたん、教室中がどよめいた。

無理もない、今まで年配の神経質そうな講師に代わって若くて美人の講師がやって来たのだから。

オレガノの調査先はここ、並盛町でも偏差値の高い学校で有名な女子中である私立緑中学校だつた。

表向きはこの学校のイタリア語臨時講師である。

「中学校で教えるのは初めてなので私の授業でわからない事がありましたら遠慮なく言って下さい。私も、この学校やこの並盛町の事とか色々と皆さんに聞きたいですから」

教室中がシン、となる。

その時。

生徒のひとりがパチパチと拍手した。

それを合図に他の女子生徒達も戸惑いながら拍手を始めたのだ。

教室中が拍手に包まれる。

まだ、緊張感がただよっているものの、どうやらこのクラスの子供達はオレガノを受け入れてくれたようだ。そんな雰囲気を感じながら

らオレガノはホッとした。

とりあえずこのクラスとならやつていけそうだつた。

彼女がこの学校に来たのは、ある少女を探すためだつた。

一週間前、ボンゴレファミリー傘下のあるファミリーが部下もろとも惨殺された。

犯人はそのファミリーのボスが可愛がっていたひとりの少女だと言われている。

十年前にイタリアで迷子になっていた所を保護、両親が見つからなかつたため、バスの養子縁組をする矢先の出来事だつた。

その後の調査でこの日本にいる所まではわかつたのだが、それ以降の足取りはようとしてつかめなかつた。

それが数日前、並盛町のこの学校の生徒として在籍している事がわかつたのだ。

少女の顔立ちは知っているものの、ここでは当てにならない。彼女を日本へ手引きしたもののがいる以上、顔を変えている可能性があるからだ。

その相手が誰なのか、また何人関わっているのか、そこまではわかつていな。

その日は何事もなく学校での一日を終え、校門を出るオレガノに声をかける者があつた。

「先生、今帰りますか？」

その声に振り返るとひとりの女子生徒の姿があった。

ボニー・テールの髪がよく似合つ活発そうな少女に心当たりがあった。

教室で始めに拍手してくれた生徒だ。

「あなたはええと…三浦ハル、さん」

「ハルでいいです」

女子生徒 ハルはそう言ひてにっこりと笑った。

「先生は日本に何度もいらっしゃっているのですか？」

「どうしてそう思ったの？」

何の警戒心も持たないハルのその笑顔に、オレガノもつい笑顔になる。

「日本語が上手でしたから、もしかしたら、と思つたんですよ」

「日本にはあまり行つてはいのだけど、日本人の知り合いがいるのでその方から色々教えてもらつたの」

オレガノの尊敬する上司である日本人を思い浮かべながら彼女自身、嘘は言つていないとひとり、納得している。

「では、この並盛町は初めてですよね。それなら今日はハルがこの町をご案内します。美味しいケーキ屋さんやかわいい洋服を売っているお店はお好きですか？」

屈託のないその話し方にオレガノもつられてまた笑顔になる。

「やっぱね、美味しいケーキ屋さんは大好きよ。あと、日用品などがそろう所も教えてもらえたからしら」

「はひつ、喜んで♪案内しますっ」

そう言つてオレガノの前を歩き始めた。

(初めてではないのだけど…)

前を行くハルの後ろ姿を見ながら、喉元まで出かかったその言葉を飲み込んだ。

今、それを言つた所でまず理由を聞かれるだろう、それなら「は」初めてだと言つた方がいい、そうオレガノは判断した。

学校を出てしばらく歩くと並盛商店街の方に出る。その中を歩きながらハルがまず案内したのはケーキ屋だった。

「ここがこの町で一番美味しいケーキ屋さんです…あれ、京子ちゃん」

ハルが立ち止まつた。

店の前、黒板のまえで立ち止まつて見ていいる女子生徒がハルの声に顔を上げた。

ブレザーの制服からびりゅう並盛中の生徒のよつだ。

「ハルちゃん」

「やっぱり京子ちゃんですか。京子ちゃんもケーキ屋さんですか？」

「ふふっ。今日はミルフィーユが三割引って書いてあるから、今から買おうかと思って」

「本当ですか？あ、でも今新しくこの町に来たオレガノ先生をこの案内中ですのあとで買いに行きます」

「じゃあ、売り切れちゃうといけないからハルちゃんの分も買っておいてあげる」

「もし良かつたら」

オレガノが話を切り出した。

「私もそのミルフィーユ、お土産にしたいから、一緒に買つてもいいかしら」

「それじゃあ、みんなで買いましょう」と、ハルが嬉しそうに言った。

美味しいケーキ屋とハルが言うだけあって店の中は混雑している。三人がそれぞれミルフィーユを買って店を出るとハルがオレガノの持っているケーキの箱を見て訪ねた。

「先生、ケーキそんなに食べるのですか？」

オレガノの持っているケーキの箱はハルや京子の持っているそれより大きい。

ミルフィーユ以外にも他にケーキを買つたためだ。

「それもあるけど、これは日本の知り合いの方にあげるためのケーキです」

「お知り合いがいらっしゃるのですか?」

ハルが不思議そうな顔で聞いた。この町は初めてだと思っているからだろう。

「イタリアでお世話になっている方の『家族がこの町にいる』。この後『挨拶に伺おう』と思って」

オレガノの言つづり『家族とはもちろん、家光の家族の事だ。

家光やバジルから話を聞いて一度沢田家に行つて見たいと思つていた。

今がそのタイミングかもしれない。

「イタリアの方なのですか?」

二人の話を聞いていた京子がオレガノに訪ねた。

「ええ

「今日、私のクラスにもイタリアからの留学生が来たんです。その子が私やハルちゃんの知つている友達だったのでびっくりしました」

「ハルの知つている友達ですか？」

京子が「じつくりとうなずいた。

「ツナ君達もじつくりしてた。ハルちゃん誰だかわかる？」

「ええと…」

少し考え込んでからその友達に思い当たつたらしく、じつくり笑つて答えた。

「わかりました、バジル君ですね」

「ハルちゃん大当たり。今日この後ツナ君の家で宿題するんだって言つてた」

「ハルもバジルさんに会いたいです」

そつとつてからオレガノの方を見て説明を始めた。

「バジルさんはツナさんのお友達でツナさん達と一緒に相撲大会に出でいたんですよ。何も言わずにイタリアに帰ってしまったのちちゃんと挨拶出来なかつたのが心残りだつたんです」

「そうだったの。それでは町の案内は次の機会にして今からその彼に会いに行かれてはいかがでしょう」

「でも、ハルが町を案内するつて言いましたから、そんな事は出来ません。先生を案内してからでも大丈夫です」

自分が言つた手前、そんな申し訳ない事は出来ないのでしょう。そう

思つたオレガノはハルにこう提案した。

「それでは、私もこの後知り合いの方の家に行きますので、道案内をお願い出来ますか？住所はここなのですが」

ジャケットのポケットから住所の書かれたある紙片を取り出すとハルに見せた。

紙片の住所をハルがまじまじと見てている。その住所に思い当たつただろう、満面の笑みを浮かべてその紙片を返した。

「ハルこの住所知っています。ここ、ツナさんの家ですよ」

「やはり。バジルの名前が出たからもしかしたらって思ったの」

「バジル君の知り合いなのですか？」

今まで黙つて話を聞いていた京子がオレガノを見て訊ねた。

「彼から皆さんの事は聞いています。あなたは笛川ア平さんの妹の京子さんですね」

京子がその言葉にうなずいた。

「あらためて」挨拶いたします。私はハルさんの学校の臨時講師をしてますオレガノと言います。その節は弟のバジルがお世話になりました

そつと頭を下げた。

ここ並盛町に行くにあたつてオレガノとバジルは姉と弟と言つ事に

なっている。

ハルと京子がそろって頭を下げた。

「それでは、ご挨拶もすみましたので、皆さん、ご一緒に行きまし
ょうか」

オレガノの言葉に一人そろって「はい」と返事を返した。

京子が見た日常

話はその日の朝に遡る。

校門の近くにある楠の大樹の前で京子は心配そうな顔でその木を見上げていた。

彼女の視線の先、だいぶ上の枝に子猫がうづくまっていたのだ。どうやら木の上に登つたものの、降りられなくなつたらしい。

近くにいた生徒の何人かも為すすべもなく、彼女同様木の上をただ呆然と手をこまねいて見ているだけだ。

誰か人を呼ばないと。そう思つてあたりを見回したその時だつた。

京子の横を誰かが通りすぎたのだ。

そのまま彼女の目の前で軽々と木に乗り、枝から枝へと飛び移つて行く。そしてあつとう間に子猫のいるところまでたどり着いてしまつた。

落ちない様幹につかまりながら子猫を捕まえようと手を出している。

その様子に見入つていると、後ろで京子を呼ぶ声がした。

「ツナ君」

京子のクラスメイトであるツナこと沢田綱吉がそこに立つていた。

「おまよひ、京子ちゃん。びひしたの、木なんか見上げて」

「あのねツナ君、その木の上に……」

そう言つて楠の上を指差したその時だった。

京子とツナの見ている前で子猫がその手をすつ抜けて下へと落ちて来たのだ。

下へ落ちる寸前、木に上った人物がどうにか子猫を受け止める。と、次の瞬間、バランスを崩して枝から滑り落ちたのだ。

「ツナ君！！」

「いってえ……」

京子が悲鳴をあげると同時にツナの姿が彼女の視界から消えた。

「も、申し訳ございません…… 沢田殿」

京子の足元で仰向けに倒れたツナにおおいかぶさる様にしてその人物が倒れている。

その声に聞き覚えがあつた。

背中を打つて痛そうにしているツナもその声を聞いて誰だかわかつた様だ。

「バジル君？」

「申し訳ありません。今どうますので」

そう言つて立ち上がるとツナの手を取つて立ち上がらせた。
それから、倒れた時に付いた背中の砂をはらつていいく。

「大丈夫ですか、十代目」

「ツナ大丈夫か？」

その様子を少し離れた所から見ていた獄寺と山本が駆け寄つて来た。

獄寺の手にあの子猫が抱きかかえられている。

下へと落ちる寸前落ちた衝撃で子猫がつぶれる恐れがあつたためバジルが獄寺の方に放り投げたのだ。

「一体何が…って、お前バジルじゃないか」

獄寺がびっくりしている。

なぜならツナの隣にいたのは並盛中の制服を着たバジルだったからだ。

「皆さんお久しぶりです。今日からお世話になります」

涼しい顔でにっこり笑つて頭を下げるバジルに皆が何も言えずにいた。

ボンゴレファミリーの組織である門外顧問組織「CDF

F」

マフィアの組織N.O.・2に所属している少年が自分と同じ制服を着

てここにいる。

「どうしてここに、そうツナがたずねようとしたその時。

それを妨げるかの様に予礼のチャイムが鳴った。

「え、もうそんな時間？」

ツナがあわてて校舎へと走つて行く。その後ろ姿に向かつてバジルは手を振つた。

「あとでお会いしましょう」

その言葉通り、ツナのクラスにバジルは留学生として転入して來たのだった。

休み時間、ツナの隣の席になつたバジルの席の周りには、ちょっとした人ばかりが出来ていた。

留学生、しかもイタリア人と言う事で始めは様子見をしていたクラスメイトだつたのだが、少し古風な話し方ながらバジルが日本語が話せる事、そしてツナの知り合いだとわかつて警戒心が解けたのだろう、徐々に人が集まり始めたのだ。

京子の友人である花が京子の席にやつてくると、人だからが出来ているバジルの席の方を見ながらため息混じりに言つた。

「それにしても、沢田の周りって、変わり者が多くない？」

「そうかな？」

「やうよ。あのスースの赤ん坊と言い、牛柄のひざこガキと言い、そしてあの古風な話し方をする留学生でしょ。京子、もつ少し男を選んだ方がいいわよ」

悪くは言つてゐるもの、その口調には悪意が含まれていない。

「花そんな事言つたら黙だだよ」

そつ言いながら少し前の席に座つてゐるツナの方を見た。

そのツナも獄寺や山本と楽しそうに話してゐる。

「じゃあ、放課後よろしくね」

「え？」

「忘れたの？英語の参考書買ひに行くから付き合つてつて言つたじやない」

「大丈夫。覚えてるよ」

「全く」

半ば呆れた様子で苦笑するとじやあね、と言つて自分の席へと戻つて行つた。

席に戻る花に小ちく手を振りながら京子はもつ一度ツナの方を見た。次の授業がもうすぐ始まるせいかツナとバジルの席の周りには誰もいなくなつてゐる。

京子の見ている前でツナとバジルが話している。

とぎれどぎれ聞こえて来る話の内容からどうやら帰りにツナの家で宿題をするのでバジルも一緒にと誘っている様だ。

楽しそうに笑っているツナを見ながら京子は次の授業の準備を始めたのだった。

田だまつの家

オレガノ、ハル、京子の三人がツナの家に着くと、ツナの母親である奈々が出迎えてくれた。

京子とハルはそのまま一階のツナの部屋へ、オレガノは居間へて通されて行く。

居間へと通されたオレガノはその光景に驚き、そして感心した。

居間のテーブルに雑誌を広げていたのは毒蠍のビアンキ。

居間から見える中庭でボール遊びをしている子供達は、ランкиングブックのフウ太、ボヴィーノファミリーのランボ、ギョーザ拳の使い手イーピン。

みなその世界では名づけの者達ばかりだ。

しかし、ここで見る限りどこもある平和な家庭の光景にしか見えない。

「今お茶入れますね」

奈々が台所へお茶を入れに行くと同時に、ビアンキが雑誌から顔を上げた。

「あら、オレガノじゃない」

「お久しぶりです、毒蠍のビアンキ。日本の生活はいかがですか?」

「愛する人がいればどこにいても天国よ。でも珍しいわね、あなたがイタリアを離れてここにいるなんて」

「私もそう思います」

今回の調査はオレガノ自ら家光に頼み込んでの事だった。

殺されたファミリーのボスはとても世話好きな人で、身寄りのない、または貧しくて学校にも行けない子供達を集めては勉強会をしていった。

字の読めない子供には文字を教え、

計算の出来ない子供にはそろばんを教え、

時々自分の部下も子供達と共に勉強会をする事もあったと言つ。

オレガノもその中で子供達に勉強を教えたり、教えてもらつていたりとしていた。

そんなオレガノを名門大学に行かせてくれたのも、門外顧問組織に推薦してくれたのも、そのファミリーのボスだつた。

彼がいなければ家光の秘書としてのオレガノはいなかつたかもしない。

無理を承知のお願いではあつたのだが、家光は快く承諾してくれたうえにバジルまでつけてくれたのだ。

ただし、一ヶ月と書いた期限付きなのだが。

「お口に合つかどうかわからないのですけど、良かつたらどうぞ。ビアンキさん、お茶のお代わりは？」

「お願ひします」

そう言つて、置いてあつた白いマグカップを奈々に差し出した。

オレガノの前に差し出されたのは日本茶と栗羊羹だった。

家光がよく食べているため羊羹は嫌いではない。ありがたくいただく事にした。

「ありがとうございます。あと先日はバジルがお世話になりました。ご挨拶代わりで申し訳ありませんがこちらをどうぞ」

そう言つて先刻買つて来たケーキを出した。

「あらあら、そんなに気を使わなくともいいのよ。こちらこそ、ツナがお世話になつたのですもの、お互様よ」

「ママン、せつかですから頂きましたよ」

ケーキの箱を見ながらビアンキが言った。奈々もそうね、と言つて中庭の子供達を呼びに行く。

奈々が中庭に行くのを見ながらビアンキはオレガノに訪ねた。

「リリィさんの位いるの？」

「一ヶ月の期限付きです。あまり親方様のそばを離れる訳にはいき

ませんから」

「やつ。組織にいるのもなかなか大変ね」

「そうですが、親方様の元で働くのはありがたいと思っています」

そんな事を話しているうちに一階からツナが降りてきた。そして、台所で飲み物を入れている奈々に何かを頼み込んでいる。奈々がうなずくと嬉しそうに一階へとあがつて行った。ツナが一階に上がったのを見てから奈々はオレガノの方に来て言った。

「ツー君が今日バジル君をここに泊めたいと言つてはいるのだけど、よろしいかしら?」

「私は構いませんが、ご迷惑ではありませんか?」

「こちらは大歓迎ですよ。ツー君もバジル君が来てくれて嬉しそうですし」

「ならオレガノ、あなたも一緒にどうかしら。ママン、構いませんか?」と、ビアンキが言つ。

「たまには女同士夜通し語り合つのも悪くないわよ」

「それはいいわね。オレガノさん、いかがかしら?」

「でも、私も一緒で」迷惑ではありますか」

「」彼らは大歓迎よ」 そう言つてはいる奈々もとても嬉しそうだ。本

当に泊まつて行つてほしのだらう。

幸い、明日は学校が休みの土曜日である。

「それでは、お言葉に甘えをせて頂きます」

「じゃあ、今夜は」ちしうね。もし良かつたらお一階の子供達にも夕食食べて行くか聞いて来ましょうね」

「私が行きましょう。バジルにも一回泊まる事を話しますので」

やつぱりオレガノは立ち上がり一階へとあがつて行った。

一階のツナの部屋の前に来ると、にぎやかな声が聞こえて来る。その扉をノックすると、はい、と元気なハルの声と同時に扉が開いた。

「あ、先生」

「！」ではオレガノでかまいません。ところで、皆さん今日は夕食をここで食べて行きませんかと言われましたけど、いかがですか？」

結局、みんな食べて行くと言つ事になり、オレガノとバジルの歓迎会を兼ねた夕食と言つ事になつた。

奈々の心尽くしの手料理をおいしくいただきながら、オレガノはツナ達と楽しそうに話をしているバジルを見た。

以前バジルと話していた時、彼は沢田家にいた時の事を「まるで日だまりの様な暖かい家でした」と言つていた。

今のバジルを見て何となく納得出来る。

それを隣で一緒にサラダを食べているピアンキに話すと、「そうね」とうなずいてこいつ言つた。

「私もここが一番好きよ。ここには私達が味わえない普通の、平和な生活がある。

普通なら私みたいな者は警戒されてしまうのと、ママンはそれを楽しそうに受け入れてこうしていろいろと世話を焼いてくれる。

この世に聖母がいるのならまさにあの人の事を言つのでしょうかね」

ビアンキらしくないその言い方にオレガノが意外そうな顔をすると、

「私だって、こいつ言つ時位あるわよ」

と、照れ臭そうに笑つた。

眠れない夜

それから一週間、何事もなく日は過ぎて行つた。

オレガノもバジルも搜索は続いているものの、様として探している少女は見つからない。

何もかも八方塞がりかと思われたその時、意外な所でその手掛けりが出て来たのだ。

その手掛けりのきっかけは、クロームからだつた。学校の授業を終えたオレガノが公園のそばを歩いていた時だつた。

公園のベンチでひとりの少女が気分悪そうに座つていたのだ。

午後の暖かな日差しとは対称的に少女の顔は真つ青でとてもつらそうだ。

右目に黒い眼帯をしたその彼女の顔にオレガノは見覚えがあつた。

ボンゴレリング霧の守護者、クローム髑髏。資料では見ているもの、実際に会うのは初めてだつた。

そのつらそうな姿に黙つていられず、オレガノは声をかけた。

「大丈夫ですか？」

その声にクロームの体がビクッ、と一瞬こわばる。それからおずお

ずっとオレガノの方を見た。

「『めんなさい。気分悪そうで見てられないから』この近くに知り合いの家があるので良かつたらそこで休んで行かれてはいかがでしょうか」

この近くなら沢田家があり、そこなら彼女を休ませる事が出来る。しかし、クロームはそんな彼女の言葉に耳をかさない。黙つて立ち上がり、歩き出そうとした時だつた。

不意にその身体がフラッとよろめく。前のめりに倒れる寸前、先回りしていたオレガノが抱き止めた。

顔をのぞきこむと顔色は良くないものの、呼吸はしつかりしている。この様子ならすぐ病院に連れて行く事もないかも知れない。ここに少し休ませてそれから連れて行つても遅くはないだろう。

クロームをベンチに寝かせると自分もその横に座つて本を読み始めた。

日も暮れて、本の文字が見えなくなり始めた頃、クロームが目を覚ました。

「お目覚めですか」

本をバッグにしまいながらオレガノが訪ねる。

ベンチから半身を起こしたクロームが不思議そうな顔で彼女を見た。

「私はボンゴレファミリー門外顧問組織のオレガノと言います。ボ

ンゴレリング霧の守護者クロームさん、調子はどうですか

門外顧問組織と聞いてクロームも警戒心を緩めてくれたらしい。牢獄を脱獄した彼女の仲間である犬と千種が自由でいられるのも門外顧問組織の家光が動いてくれたのを知っているからだろ？

「久しぶりに寝たから大丈夫」

その口ぶりからクロームがここ数日寝てなかつたのが見て取れた。

「もし良かつたらどうしてそなつたのか話して頂けないでしょうか？」

仲間が大騒ぎして眠れないと言つ訳ではなさそうだ。

そんな事を考えながらオレガノはクロームの次の言葉を待つた。

「歌が聞こえるの」

「歌ですか？」

クロームがこつくりとうなずいた。

「夜になると毎日。一晩中聞こえて来るの。犬と千種も知らないって。何度も氣のせいだと言われたの」

「どんな歌ですか？例えばロックみたいな騒がしい歌とか」

「違う」

うつむきながら首を横に振ります。

「ただ静かな歌。静かすぎてかえつて眠れないの」

どう言ひう意味なのだろう。そう考へてゐるうちにクロームが立ち上がり、何も言わずに暗闇の方へと去つて行つた。

素つ氣ないクロームの行動に微笑みながら今夜あたり黒曜ランドに行つてみようか、オレガノはそう考へていた。

黒曜ランドは隣町の旧道ぞいにある。

以前は大型レジャー施設として賑わっていたここも土砂崩れで半壊してから修繕もされずに今は廃墟となつてゐる。近くに新道が出来てから車もめつたに通らなくなつてゐる。

その廃墟に、クロームは仲間と共に住みついてゐる。

オレガノがバジルを連れてここに来たのは夜もかなり更けた頃だつた。

黒曜ランド近くは人も車もめつたに通らないため、街灯もついていない。

半ば暗闇の中を一手にわかれて様子を見る事にした。

しばらく暗闇の中をじつとしていると、目も慣れて來たのだろう、おぼろげながら周りの様子が見えて來た。

オレガノがいるのは、廃墟の黒曜ランド正面から左側の壁の端の方。半ば崩れかけた壁のそばに立つて辺りを見回している。

見たところ、人の気配はない。

静か過ぎて眠れない、とクロームは言つた。

あれからその意味を考えてみたものの、何度も考へてもその意味がわからぬ。

そんな事を考へてゐるうちに雲が切れて半月の月が顔を見せ始めた。

その明かりでほんの少しだけあたりが明るくなる。

その時だった。

微かに、歌声が聞こえて来たのだ。

(来た)

あたりを見回したものの、人の姿はない。しかし、歌声は微かに聞こえて来る。

そして次の瞬間。

不意に周りの音が全て消えたのだ。

遠くの新道を走る車の音、近くで鳴いていた虫の鳴き声まで、全て周りの音が消えてしまった。

まるで音のない世界にいる、そんな感じだった。
その中をあの歌声だけが微かに聞こえて来る。

クロームが静かすぎて眠れないと言つた意味がわかつた様な気がした。

音のない世界がこれ程人を不安にさせ、孤独にさせるものだとはオレガノ自身、思つてもみなかつたのだ。

微かな歌声を頼りに声のする辺りを検討つけて見るものの、人影は見えない。

不意に、歌声が途絶えた。

同時に、周りの音が聞こえ始める。

まるで何もない世界から現実に引き戻される、そんな感覚に軽いめまいを感じながらオレガノはバジルの方へと走つて行つた。

正門から右側の壁の端の方に、バジルがメタルエッジを構えて立つてゐる。

そのバジルと向かい合う様に、ひとりの銀髪の長い髪の少女が立つていた。

月を背にしているため、少女の顔は見えない。しかし、彼女の着ている制服から彼女が緑中の生徒だと言う事はわかつた。

こんな深夜に中学生が出歩いている。

人気のないこんな所で一体何をやつているのだろう。
オレガノがそう思った時だつた。

不意に少女が長い髪をなびかせて動いた。
バジルに背を向けて逃げ出して行く。

慌ててバジルが少女を追いかけようと動くものの、すでに少女の姿はなかつた。

「申し訳ありません。逃げられました」

バジルがオレガノに申し訳なさげに頭を下げる。

「仕方ないわ。それより、彼女の顔を見たの？」

「いえ、暗くてよく見えませんでした。でもあの制服は確か、縁中

のでは？」

「間違いないわ」オレガノはうなずいた。

「もしかしたら彼女が私達の探している人物かもしれない」

それからじしまじま待つてみたものの、結局彼女が戻つて来る事はなかつた。

黒曜ランドをあとにしながらオレガノはバジルに訪ねた。

「バジルはあの歌を聞きましたか」

「聞きました」

そう言いながらバジルはうなずいた。

「あれは一体何でしょうか。まるで…音のない世界に落ちた様な感じでした」

確かに、とオレガノも思つ。

「私にもよくはわからない。どちらにしても、もう少し彼女についての事を調べてみる必要があるわね。
私は引き続き緑中で調査をしてみる。バジル、あなたは引き続き並盛中での調査をお願いします」

「わかりました。オレガノ、気をつけて」

この時、二人は気付かなかつた。

これが、戦いの始まりだと言つ事に……。

戦いの火蓋を切る者は

その次の日の学校の帰り道、バジルは獄寺と一緒に歩いていた。

バジルがオレガノと一緒に住んでいる賃貸型マンションは獄寺の住んでいるマンションの少し先にある。

そのため、一緒に帰る事が多い。

その一人が、同時に立ち止まつた。

二人の行く先、同じ並盛中の制服を着た少女が立っていた。

長い髪を上に結び、美しい蜻蛉玉のついたかんざし付きの黒いリボンで止めている。

切れ長の瞳の美しい少女だつた。

その少女が一人を見て行つた。

「昨日、かけるを襲つたのははどうぢ？」

「かける？」

バジルが聞き返す。それが答えだと思ったのか少女が右手を上げた。

その手には鉄扇が握られている。

「あなたね。ふうん、マフィアの人つて聞いたからもっとおじさん

だと思つてたんだけビ、『んな子供もいるんだ』

「てめえ、何者だ」

獄寺が険しい顔で聞き返す。少女のヤバい雰囲気を感じ取つたのだ
わ。」

普通の人なら獄寺のこの気迫にたじろぐ事だろう。
しかし、目の前の少女は平然としたものだ。

「人に物を訪ねる時は自分から名乗るものでしょう。でも、名乗つ
た所であなたに名乗る理由なんて何一つないけど」

そう言うとバジルに襲いかかった。

両手に持つた鉄扇がバジルの頭を割る寸前、バジルが後ろによける。
獄寺が武器として使つてゐるダイナマイトを両手に持つて身構える
と、バジルに叫んだ。

「バジル離れる!……この野郎、果てる!—!」

バジルが少女から離れると同時に、火のついたダイナマイトが少女
に向かつて飛んで行く。

少女の周りで獄寺の飛ばしたダイナマイトが爆発した。

爆煙で少女の姿が見えない。火薬の量をある程度抑えていとはい
え、この至近距離で爆発すれば少女も無事ではすまないはずだった。
といふが。

「こんなもんなの？」

爆煙が収まると、開いた鉄扇を持った少女が現れた。あれだけダイナマイトを投げられたにも関わらず、制服が多少汚れただけで怪我ひとつしていない。

「もう少し歯ヒたえがあると思ったけど、弱いわね」

「うせえつ！ 一倍ボム！」

もう一度獄寺がダイナマイトを増やして投げつける。それを少女は全て鉄扇で弾くと獄寺に向かって飛びかかった。

「覚悟しなさい」

「覚悟するのほそっちだぜ！」

獄寺がニッヒ笑った。

その顔に鉄扇が届く瞬間。

不意に少女の後ろで何かが爆発したのだ。

その爆風で少女が地面に叩きつけられる。

獄寺が二倍ボムとして放ったダイナマイトはロケットボムで方向を変えられるダイナマイトだった。

獄寺自身が作った特殊ボムで動きがかなりトリックキーなため彼自身でしか扱う事が出来ない。

「答えるー！ めえ何者だ！」

少女の方は地面に叩きつけられた衝撃で呻いている。それでも立ち上ると頭をふりつつ、笑った。

「名乗る理由はないと言つたでしょう。でも、私をここまで追い詰めたのだからこれだけは教えといてあげる。

「夜」に氣をつけなさい」

そう言つと、二人の前から消えてしまった。

「待てっ！」

あわてて近くをさがすものの、少女の姿はもつ見えない。

「逃げられたか」

ため息をつきながら獄寺が頭をかいた。

「それにしてもあいつ、一体何者だ？ 見た所並中の制服を着てたが、生徒なのか？」

それからバジルの方を見て訪ねた。

「バジル、お前俺達に内緒で何を調べているんだ？ あの女はお前をマフィアの者だと言った。なら俺達にも関係してるんじゃないのか？」

獄寺がいつも「十代目」と呼んでいるツナは候補とは言え、大手マ

フイアであるボンゴレフア//コーのボスである。

立場上はマフィアに属していると言つてよかつた。

「申し訳ございません、今はまだ何も言えません。

拙者のせいで獄寺殿を巻き込んでしまいました。申し訳なく思っています。そして巻き込んでしまってこんな都合のいいお願ひをするのも申し訳ないのですが、今起こった事は誰にも言わないで頂けないでしょ

うか？」

「誰にもか」

「はい。もう少し敵の正体がわかつてから改めてお話しします。それまで誰にも話さないでほしいのです」

しばらくの沈黙。バジルを半ば睨む様に見ていた獄寺が何も言わず地面に落ちていたバジルの鞄を拾つて手渡し、自分の鞄も拾つた。

「十代目に迷惑かけんじゃないぞ」

そう言つてすたすたと先を歩いて行く。

先を歩く獄寺に頭を下げるが、バジルは獄寺の後を歩き始めた。

危機を救つ者は

獄寺が少女と戦つていたその頃。

オレガノも田の前の敵と戦つていた。

学校の帰り道、なぎなたを持った並盛中の制服を着た少年に襲われたのだ。

田の前の少年は、前髪をおでこの上で結んでいるのと背の低いで小学生位に見える。

着ている並盛中の制服も彼には少し大きいのだろう、まるで服が歩いている様に見えた。

「お姉さんには何の恨みもありませんが、何しろ、の方の依頼でして。そうですね、腕の一本辺りで手を打ちますが」

日本では銃を持ち込めないため、今のオレガノは武器を持っていない。頼れるのは己自身だけだ。

「私は高いですよ」

「お姉さんに選択の余地はありませんよ」

そう言ってなぎなたを振り下ろした。

その刃をひとつ飛びでよけ、一気に少年の懷へと飛び込んで行く。

オレガノの手が少年の首を掴もつとしたその瞬間だった。

少年がなぎなたの柄でオレガノをなぎ払ったのだ。

オレガノが短い悲鳴と共に横へと吹き飛び、地面に叩きつけられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4010x/>

銀の月と銅の星

2011年11月20日01時18分発行